



慈林小だより



令和7年度 11月号 令和7年10月31日(金)

「苦手なこと」を「楽しさ」に

校長 石原 昌治

朝夕の冷たく澄んだ空気に秋の深まりと冬の訪れを感じる季節となりました。10月25日(土)、28日(火)の2日間にわたり、運動会を開催しました。地域、保護者の皆様におかれましては、お足元の悪い中ご来校くださり誠にありがとうございました。また、PTA総務・運動会ボランティアの皆様におかれましては、早朝の準備から片付けまでお手伝いいただき、心より感謝申し上げます。

「自分は、走ることが苦手で友達に負けたけど、なんか楽しかったです。」一人ひとりが全力で取り組んだ運動会が終了して、児童たちの頑張りをねぎらっている時に、このような感想を言った児童がいました。はっとしました。特に、2日目の徒競走やリレーは、順位がはっきり出る種目です。走ることが得意な児童がいれば、当然、苦手な児童もいます。「運動会」という名のおり、主に体育科の要素が強い行事なので、運動が苦手な児童にとっては、もしかしたら苦手な行事だったかもしれません。でも、苦手でもその児童は、「『なんか』(どういう感覚か自分でも良く分からないけど)楽しかった」と感じた訳です。私自身、その感覚をかつて感じたことがあったことを思い出しました。

私は、小学生の時、エレクトーンを習っていたのですが、とにかく苦手で上手く演奏することができませんでした。しかし、ある時、先生のピアノと友達のエレクトーンとで一緒に演奏する機会があり、渋々弾いてみたのですが、演奏後、まさに「何となく楽しかった」感覚になったことを今でも覚えています。

「苦手なこと」が「楽しさ」に変わる時は、どのような時か人により様々な意見がありますが、私は、『他者とのつながり』がキーワードではないかと考えます。一人では、上手いかずに苦手意識を持ってしまうことも、周りの人との関わりの中で、「あれ、何となく楽しくなってきたぞ」という感覚になることもあるのではないかと思います。前述した児童も、運動会独特の雰囲気の中、みんなから応援されて、楽しく走ることができたのだと推察します。

人は、誰しも何か苦手なことはあるはずです。私もそうですが、できれば苦手なことから逃げたいと思ってしまいます。苦手なことが急に得意になることは難しいですが、周りの力を借りることで、「何となく楽しい」と感じることはできると思います。例えば、跳び箱が苦手で上手く跳べなかった時、計算が苦手で途中で止まってしまった時、友達からの助言や声援で、少しずつでも前に進めることがあるのではないのでしょうか。運動会をとおして、あらためて周りの人と繋がること、協働することの大切さを感じることができました。

11月以降も、音楽会をはじめ、友達と力を合わせる行事が多くあります。子どもたちには、「苦手なことがあっていいんだよ」「苦手なことも友達と支え合えば楽しくなるよ」ということを伝えながら、これからも慈林笑楽好を一緒につくっていきたいと思います。